

会津漆器業の歴史的考察

「問屋制」を中心として

坂本三恵

日本人にとって「近代化」とは、特に第二次世界大戦後は、欧米の影響により、「西洋化」することであると考えられてきた。

そして、その考えが、今もなお一般に浸透し、肯定されていることは事実である。

確かに、戦前に比べると、欧米並みに「近代化」されたことによって、日本人の生活は、大変合理化され暮しやすくなってきた。

しかし、ここ数年前から、真の「日本の近代化」とは、はたして「西洋化」することなのであろうかという疑問が、人々の間に生まれてきた。

つまり、今までの合理化のみを追求してきた日本の「近代化」のなされ方に、日本人の心情に合わない、味けなさや物足りなさなどという不満を持った人々が増えてきたのである。

そして、今までの「日本の近代化」のあり方に対する反省をこめて、自分達が、忘れてきたというより、忘れようとしてきた、昔からの「日本らしさ」を再発見しようという動きが起こってきた。

これが、一時、マスコミなどを賑わした、「ディスカバー・ジャパン」という言葉に代表されるような風潮である。

これによって、日本全国、各地の伝統産業が見直されるようになったのである。

従って、日本には、昔から、多くの伝統産業があるが、今日ほどこの伝統産業における「手づくりの味」とか

「本物の味」ということが、見直されている時期はなかったのではないだろうか。

その中であって、私の故郷の伝統産業である「会津漆器」も現在、この波に大きく揺れている。

何故なら、「会津漆器」は、近頃ブームとなっている「輪島漆器」のように、伝統性を重要視し、元来からの方法をかたくなに維持して作りあげられた高級品とは違い、近代的機械制生産方式によって大量に生産される、豊富な種類と価格の低廉による大衆品を本命として、今日に至っているからである。

つまり、同じ漆器という産業でありながら、「輪島漆器」が「伝統性」を重要視してきているのに対して、「会津漆器」は歴史的にみても伝統性というよりもむしろ「産業性」を重要視して今日に至っているといえるのである。

それは、現在、「会津漆器」におけるプラスチック製品と木製品の割合が、八対二であるということからもわかる。

しかし、この「会津漆器」を支えてきたプラスチック製品が、伸び悩んでいる現在、会津も古来から受け継いできた手法を用いて、「輪島漆器」のような「手づくり」の漆器を生産していけばいいのではないかという風潮が、世間一般に言われるようになってきた。

しかし、プラスチック製品から木製品への移行は、材料も少なく、腕の良い職人もわずかであるという現実からも、一般に言われるほど地元では、容易ではないと考えられているのである。

つまり会津漆器の場合、世間一般が考えるようなディスカバー・ジャン的な考えで、そう簡単には、会津漆器の主力製品であるプラスチック製品から、現在の会津漆器業界において生産が容易でない木製品に移行することは、大変困難なことであるといえるのである。

このような岐路にたつた「会津漆器」を指導していくのは、歴史的にみて、これまでがそうであったように、今後とも「会津漆器」の中心的役割を担っていく「問屋」である。

「問屋」は、過去における「会津漆器」の幾多の岐路にも、業界の中心となって乗り越えてきた。

従って、この「会津漆器」における「問屋制」の功罪は「会津漆器の歴史」に多大な影響を与えてきたことからも、問屋制のあり方それ自身が、会津漆器の歴史そのものといっても言い過ぎではない。

それでは、何故このように「問屋」を中心として、会津漆器が発達してきたのかを歴史的に探っていくと、それは会津藩の保護と統制のもとに発展した、いわゆる「城下町工業」であった事にその原因を見つけることができる。

そして、この事は、今日の会津漆器のあり方に非常に大きな影響を与えているのである。

それは、会津藩が「商人である「問屋」と工人である「職人」との明確なる社会的分業体制」という、商・工分離政策を会津漆器業に対して行なったため、結果的には、商人的性格をもつ「問屋」の力を増大させ、工人である「職人」の力を零細なものに留めてしまったことに起因するのである。

それでは一体、いつ頃からこのような会津藩の商・工分離政策が、確立され強化されたのかを歴史的に探っていくと、それは徳川秀忠第四子「保科正之」以来のことであり、それ以後の松平時代といえる。

この時代の会津藩の会津漆器業に対する経済統制の仕組みを具体的にみてみると、第一に、完全なあるいは部分的な漆液の専売制を通してする商品生産者⇨塗師に対する規制。第二に、製造業者と販売業者の分断、つまり明確な商工分離政策。従って第三に、販売独占の特権を持つ商人株仲間間の公許制。これらに、商工業としての漆器業に対する藩の経済統制政策の根本があるといえる。

そして、このような販売独占の特権を公許される商人株仲間間は、漆器製造にはノンタッチの、その意味では商人の工人への仕込みや前貸を含まない、純粹の仲買商人として存在したのである。

製造業である塗師と販売専業者である仲買商人の分離ということも、次第に生産販売額を増大しつつあった漆器業に対する、藩権力の巧妙な社会統制と産業統制の一石二鳥策であったといえるであろう。

つまり、藩の専売制を通して藩みずからが前貸問屋の性格を示しながら、産業上の統制を、分断させた商・工に別々に加えることは、商工業者の実力を分解させ、封建社会を維持する賢明な手段でもあったのである。

しかし、以上の様な藩の政策は、だからといって漆器業を衰微させることを目的としたのではないことは明らかである。つまり、会津漆器業に、保護を加え発展させつつ、これを統制的に収奪して行こうとするのが、藩の方針だったといえるのである。

商人株仲間間の誕生によって、自らが生産した漆器の販売権を、完全に奪われてしまった「塗師職人」達は、その結果、明治維新という一大社会経済変革の時期において、何らなす術もなかった。そして結局、藩に変わり徐々に次代のリーダーとしての力を培ってきたと考えられる商人株仲間のもので、働かねばならなかったのである。

このことから、維新後明治以来の会津漆器の展開を、主導的に推し進めることとなった商人問屋層の存在とその形態は、藩制期の商人株仲間にも認めることができるのである。

従って、会津漆器業における問屋制は、幕末において既にその前提的諸条件を与えられている。それが明治期に入ると、社会的・経済的な背景の変化に応じて、「問屋前貸制」という形で、明治後期から大正期にかけてその原型が確立されたのである。これは、以後の会津漆器業における支配的体制として存続し、会津産地の社会的・経済的構造を明確に特徴づけるものと考えられるのである。

会津漆器の製造販売にあたって、支配的地位を占めるのは「問屋」―「たな」である。問屋は、費用および収入の主體的な計算の上に、原則として製造業者―職方に対して、資金の前貸しや生産資材の仕込みを行なって、前貸加工または請負加工させる。そして、その製品を得意先に販売する。

従って、その性格は、いわゆる産地型問屋であり、そこに支配する関係は「問屋制家内工業」の形態であるとされる。

このような体制の中で、親方制度のもと年季徒弟見習いにより、職人の養成が行なわれる「年季徒弟制」は発展したのである。

明治初期には、前貸制による「たな」の職方の支配・掌握は、まだ強くなかったから、大規模な親方は「たな」とは、対等に近い社会関係を保ち得たのである。しかし、大正期に入り問屋支配が確立して、親方の権威が「たな」の権威の前に薄くなるに従って、徒弟制度はそれ自体が動揺を見せてきた。そして大正末―昭和初期における不振を契機として「問屋制」の悪い面が露骨化するとともに、徒弟希望者も次第に減少の一途をたどることになったのである。

また、昭和恐慌時の問屋業の経営状態悪化のしわ寄せは、職方にも前渡金の減少、工賃未払いの増大などとなってあらわれた。

このような状況が、職方の「たな」に対する依存度の縮小―問屋支配からの離脱を行なわせる様になったのである。これは、一方においては前貸制の衰退、他方においては職方の自覚と問屋との抗争をもたらし、問屋制が弱体化し、やがて変化していく前ぶれとなったのである。

恐慌も回復した十二・三年頃になると、当時漆器に対して要求され始めたところの、質中心から価格中心へという「大衆品」も必要とされ、製品の種類の豊富さを誇った会津漆器は、増々その性格を強めた。多品種の生産という特性は、当産地においていわゆる問屋制を必然的なものとした原因であり、またその確立によって逆に強められた結果でもある。

昭和十六年の工業組合の結成により、一時期は形の上では工人は問屋支配から完全に離脱できたのであるが、戦後になると再び「問屋支配の復活」がなされた。しかし戦前のような仕込みが行なわれることは少なくなった。昭和三十三年・四年、中共貿易の途絶により漆の輸入が中絶されると、会津漆器は「問屋」を中心として素早くプラスチック漆器に移行し一時隆盛を極めたのである。

このような転換の素早さは、会津漆器業の中心である「問屋」が、「目先の利」に強い商人的性格を、強く持っているからだと思われるのである。実際これによって幾多の岐路をも素早く乗り越えてきたのであるが、それ故に「将来の利益」までは深く考慮せずに、方向を決めるといふ風潮も強いのである。

昭和三〇年代、栄華を誇ったプラスチック製品も、昭和四〇年代に入ると次第に停滞してきたのである。

それは、プラスチック製品の大量生産が可能になったため、たちまち生産過剰になったことや、ホルマリンなどの公害問題がでてきたこと。また木製品が、ディスカバー・ジャンプ的な風潮や生活様式の高度化により、需要が増えてきたことなどの理由からである。

これにより、当産地でもプラスチック製品から木製品への移行が次第に考えられるようになったのである。

しかし、この移行は木製品の伝統技術を継承すべき職人の不足、後継者不足という大きな問題にぶつかり思うようには進んでいない。

それでは何故、このような問題が起ったのかといえば、それは会津漆器業の中心である問屋が、これまでみてきて分るように昭和三十三年以後、プラスチック製品を本命として木製品には余りウエイトをおかなかつたからなのである。

つまり、問屋が伝統技術の技術伝承と後継者育成ということを、余り積極的に行なわなかつた結果から起つたのである。

従って、現状の当産地では、木製品へ移行することがはなはだ困難であることを、一番よく分っているのも問屋自身といえよう。

仮に、将来木製品に移行できたとしても、輪島のような高級品とは違い、歴史的にあくまでも大衆品で勝負してきた会津漆器が、現代日本の生活様式のあり方からいって、昔のように、生活必需品として用いられるかどうかは大変疑問であり、移行した後も将来の見通しは決して明るくないのである。

しかし、今後の会津漆器にとって、プラスチック漆器においては、問屋又は職人は製品企画力・デザイン開発力を高め、技術を改善して製品にオリジナリティをもたすことが重要であり、木製品においては、問屋を中心にして職人の不足、後継者不足を早く解決して品質を改善していく事が急務であることは確かである。

そして、会津漆器の将来にとって、何よりも肝心な事は、会津漆器業の中核である問屋が、「目先の利」だけを追いかけて、将来の事を深く考慮して会津漆器業を指導していくことであり、職人もまた商取引には無為・無関心、すべてを問屋にまかせるのをやめ、意匠・品質の点で独得のものを生むより努力し体質を改善することである。

又、問屋にも職人にも共通する「今さえ商売がうまく成り立っていけば良い」というような、安易な今までの漆器に対する認識を改め、真剣な姿勢で将来の問題に取りくむことが、現在の会津漆器業界にとって、一番必要なものではないだろうか。

以上、会津漆器における「問屋制」のあり方を、歴史的に探っていくことによって、今後の会津漆器の方向を導きだそうとしてきたわけである。

しかし、現実を抱えている問題が、歴史的に発展してきた「問屋制」に起因するところが大きいため、ただ単にプラスチック漆器が伸び悩んでいるから木製品に移行すれば解決するといった単純な問題ではないことが、その方向を明確に導きだすことを困難にしたといえる。

その意味で会津漆器業の歴史的推移の中で、会津漆器における「問屋制」のあり方についての功罪を列举すれば、問屋のその商人的性格から、幾多の岐路をも素早く乗り越えてきたことがあげられる。しかし、その反面では、伝統技術を継承すべき職人の不足、後継者の不足、低価格競争による製品の信用低下、そして最も大きなこととしては、職人の無気力さを培ってきたことなどがあげられる。

そして、このような問題は今だ模索されている段階であるので、恐らく次の会津漆器業を担う若者達が受け継

ぐことになるであろう。

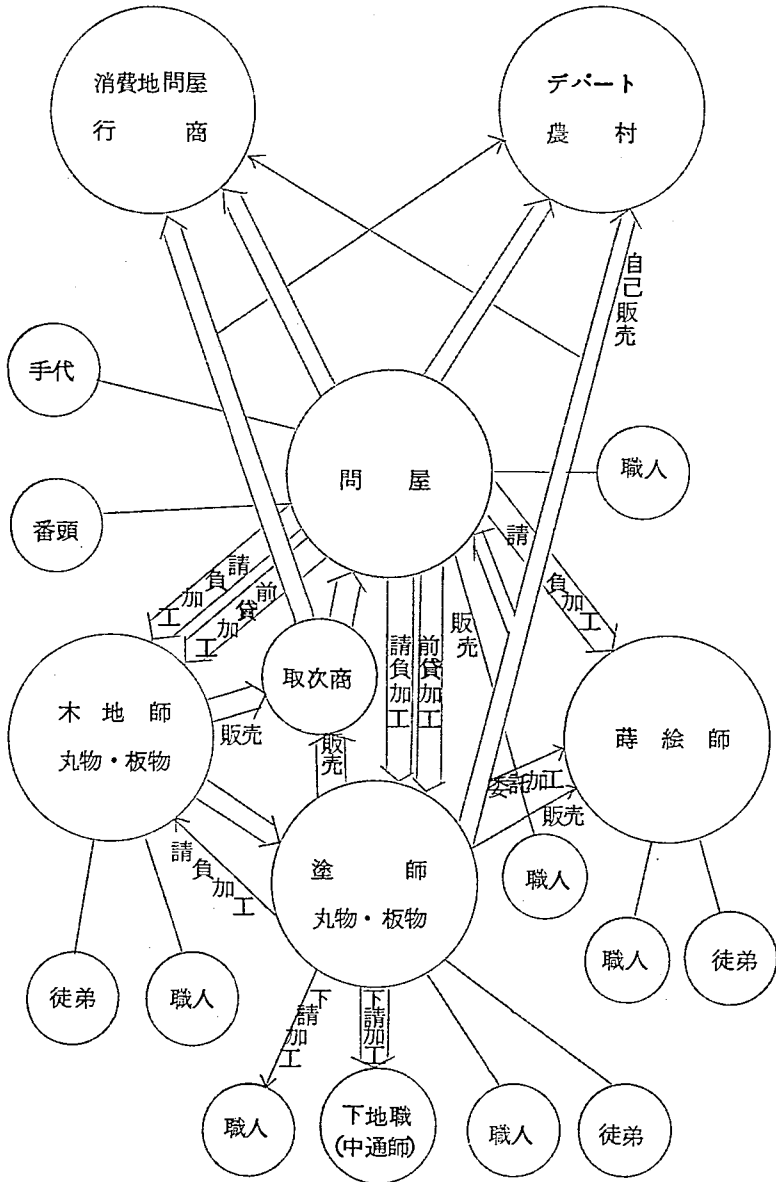
けれどもこの若者時代になつたとしても、現在、徒弟養成所で「親や事業所が行くように勤めるから来たのであって、将来この職業に携わるかどうか分からない者もいること。又、会津以外から研修に来た者の方が、一般に熱心であること。」などの大きな問題を抱えていることから、会津漆器の将来の見通しは、決して明るくないのである。

しかし、現在、このような徒弟養成所の中などにも、今だ旧態依然の漆器業界における自分の仕事に、誇りを持ち将来を真剣に考えている若者が少数でもいることに、一条の光を見出し、今後、私の故郷の伝統産業である「会津漆器業」の将来を見守り続けていきたいと思うのである。

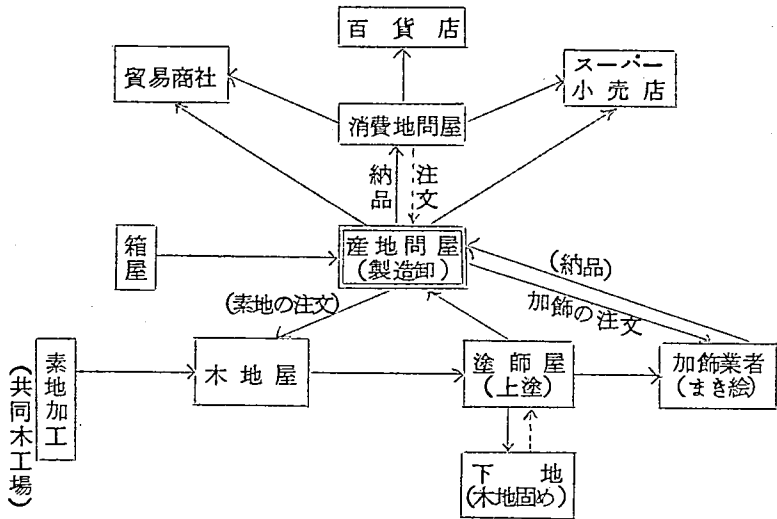
〔参考文献〕

- (1) 羽田 新 他著 「徒弟教育の研究」 昭和三十七年 御茶の水書房
- (2) 半田市太郎著 「近世漆器工業の研究」 昭和四十五年 吉川弘文館
- (3) 沢口 悟一著 「日本漆工の研究」 昭和八年 丸善株式会社
- (4) 谷川 徹三他著 「日本の工芸―漆―」 昭和四十年 淡交社
- (5) 山崎 充 著 「変わる地場産業」 昭和四十九年 日本経済新聞社
- (6) 福島県立会津短期大学産業調査室 「地域産業」 第二号 昭和四十年
- (7) 河野 健二著 「産業構造と社会変動・第二巻 地域社会の変貌と住民意識」 昭和五十年 日本評論社

第I図 明治・大正期における問屋制



第Ⅱ・1図 昭和初期における問屋制（木製漆器）



第Ⅱ・2図 (プラスチック漆器)

